
憑依藁人形

朝夢 瞬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

憑依藁人形

【Nコード】

N4841BA

【作者名】

朝夢 瞬

【あらすじ】

軽い気持ちで行った肝試し。そこで見つけた藁人形。ここから、事件が起こってしまう。

(前書き)

登場人物は俺、以外はアルファベットわけされてます。

会話文の前にしゃべった人物のアルファベットがつきます。

初ホラーなんでそこまで怖くないと思いますが、よろしくお願いします。

俺「おいおい、本当にこんなところに心霊スポットなんてあんのかよ。」

A「いや、絶対にここであってるって。ほら、ここに書いてんじやん。」

B「でもどこみても木ばっかりだぜ。」

俺たち高校生三人組は暇つぶしにでもと、心霊スポットにきていたなぜこんなところにきたかというと、Aの失恋なくさめ鍋パーティーをしていたのだが、だいぶネタも尽き、暇してたところで雑誌でこの場所を紹介してあったので、きたっていうわけだ。

俺「もう帰らない？」

B「だな。あゝあ、こんなだったらうちでゲームしてた方が良かったぜ。」

俺たちがすでに後悔モードに入った時にAがこっちに向かって呼びかけてきた。

A「おい、なんかあるぞ。懐中電灯投げろ。」

どうせ勘違いだろうが、Aは言い出すと引き下がらないタイプと、知っていたので素直に懐中電灯を投げた。

A「サンキュー。っておいこれやべえやつなんじゃね。」Aが笑いながらつぶやいた。

B「おい何がやばいんだ。」

A「ちよつと、こつちきてみるよ。」

俺とBは言われた通りに小走りでAの元に駆け寄った。

B「うわ、これはマジじゃん。」

俺がAとBの後ろから覗き込むとその木のしたらへんに藁人形が三体、太い釘で打ち付けられていた。

俺「これはやばいだろ。ってAなにやってんだよ。」

A「いやゝなんか昔っから刺さってるのは抜きたくてね。」

B「いや、お前のくせなんて知らねえよ。てか、釘引つ張るのやめる。」

俺もBもだいが真顔で言ったためか、Aは素直に抜くの辞めた。

A「ちえっ、まあとりあえず、こんだけって分かったしもう帰ろうぜ。そして、ゲームでもしようぜ。」

俺もBも異論はなかったので、素直に車まで歩くと乗り込みAの家に向かった。しかし、タクシーまで歩いている最中の、後ろからの異様な存在感は気のせいだろうか。

〈学校〉

B「おつはよー。おとといのはびびったな。」

俺「おはよー。たしかに、てか心霊スポットではないよな。」

B「まあね、まあどっちにしる怖かったけどな。」

俺「あれ？そういえばAはまだきてないのか。」

B「そうみたいだな。まあ、あいつの必殺技、ずる休みだろうよ。」
そこまで話すと、C先生が入ってきた。はあここからまた、地獄

のような眠気を誘う授業が始まるのか。と思っただが、今日は違った。C先生は悲しそうに黒板の前に立つと、咳払いをしてから話し始めた。

C「えー今日は皆さんに非常に悲しいお知らせをしなければなりません。落ち着いて聞いてください。A君がお亡くなりになりました。」

ざわざわとしている教室で、俺は驚きを隠せずにいた。Bも驚いたようで、ハツとしたような表情でこっちを見ていた。

C「皆さんいろいろと聞きたいことがあるとは思いますが、今は抑えてください。お葬式もすみましたので、A君は成仏しました。とりあえず、今日の授業は自習にします。あつ後、俺君とB君はちょっと職員室にきてください。」

俺はまだAが死んだことが信じられなかったのと同時におとといのことが頭をよぎっていた。職員室にBと一緒にいくと、まだ一回も

入ったことがない教室に連れていかれた。

C「君たちは、A君の一番の友達だったよな。」

俺もBもAとは長い間つるんでいたの、否定はしないで頷いた。

C「だったら君たちだけに話さなければならぬことがあるんだ。絶対に誰にもいふなよ。」

俺とBはやはり頷くことしかできなかった。

C「落ち着いて聞いてくれ。」

C先生はそこでいったん言葉を止めると、次の瞬間にとんでもないことをいった。

C「A君は、自殺だったんだ。飛び降りだ。」

その言葉を僕たちは信じることはできなかった。

B「なんですか！！おとといまであんなに楽しそうにしてたのに！！！」

俺もBと同じことを言いたかった。Aに限って自殺なんか。

C「落ち着いてくれ。自殺の理由を何か知っていないかと思っただけ、その様子じゃ知らないようだね。」

俺「なんで自殺だってわかるんですか。」

その質問にC先生は困っていたが、やがて口を開いた。

C「遺書があつたんだよ。A君の字でびっしりと『ごめんなさい』と書いてあつたそうだ。」

その言葉を聞いた僕たちは、もうおとといのことしか、頭になかった。

〜B宅〜

その後、俺たちは学校を早退し、Aの家にお焼香をあげにいき、B宅でいったん今までのことを整理した。

B「やっぱり、おとといのがやばかったのかな。」

幽霊など全く信じていなかったが、こう考えるのが普通だろう。

B「もしかしたら、失恋したのを引きずっていたとかは？」

俺「あの時のあいつのテンション見てればそうじゃないってのはわ

かるだろ。」

B「・・・だな。」

俺「藁人形に触るのはまずかったか。」

B「俺たちは大丈夫だよな？触ってないもんな。」

俺「まあ、大丈夫だと思う。」

それ以降は会話をしても全く続かず結局、俺は自分の家に帰宅した。しかし、想像もしたくもない事件が起こってしまった。

俺が家でニユースを見ていたらこんな事件があったらしい。

《高校生自殺。目撃者の証言によると、その高校生は電車が来るまで普通だったのだが、電車が見え始めた途端に、「すみません」と連呼しながら線路に飛び込んだ模様です。》

このニユースを聞いた時一瞬ドキッとしたが、予想は的中してしまつた。Bの家から電話がきた。Bが遺書を残して死んだ。やっぱり、あのニユースの高校生というのは、Bだったんだ。

これで疑いの余地はなくなった。やはりあの藁人形が自殺させている。

とりあえず手を打たなければと俺は夜中だが家を飛び出して、叔父の寺まで行つた。

（寺）

俺「おじさん。」

俺は寺の中に飛び込んだ。叔父はこんなに夜遅いが、そこで座禅を組んでいた。

叔父「やはり来たか。胸騒ぎがしていたんだ。何があったか話して見なさい。」

俺はあの夜から今までのことを全て話した。話した途端、叔父の顔色はかわつた。

叔父「なんてことを！！その藁人形は憑依藁人形と呼ばれる恐ろしいものだ。」

叔父の話によると、俺たちが見たのは憑依藁人形と呼ばれるもので、

必ずその馬に行ってしまった人の人数分あり、その藁人形からの近さ順に身体を操られ自殺のように殺されるというものだった。

俺「どうすればいいですか!!」

普段は敬語なんて使わないが、今は違った。

叔父「今すぐその場所に一人で行き、その釘を抜きなさい。」

この時間に一人で行くのはかなりの怖さだがもうそんなことは言っ
てられなかった。

俺は叔父に「弱い心を見せるな!!」というアドバイスを受け取り
タクシーをひろうと、すぐさまその場所に向かった。

車で入れるギリギリのところまで来ると俺は全速力で走った。途中
木の皮で切つてしまい血も出たが、脇目も振らず走った。そしてつ
いにその場所についた。

俺の視界には藁人形いや、憑依藁人形が一体だけはいった。やはり、
二人が死んだから減ったのか。いや、そんなこと考えてる場合じゃ
ない。

俺は刺さっている太い釘に走り寄ると、両手で掴み思いつきり引つ
張った。しかし、あの時Aが言っていた通り、かなり抜けない。俺
が十分間ぐらい足も使つたり、揺すつたりした結果がついに現れた。
太い釘に藁人形が刺さつたまま抜けたのだ。

良かった。これでとりあえず助かる。

そう思ったら俺は急に嬉しくなつてその太い釘を持つてる右腕を思
いっきり持ち上げてガッツポーズを決めて見せた。

それは一瞬だった。俺自身何が起こつたか分かるのに時間がかかつ
た。そして今状況をつかんだがもう遅いだろう。さっきまで太い釘
を持ち上げていた右腕は俺の首にそれを突き刺していたのだ。俺は
地面に倒れこんだ。

そうか、そうだったんだ。釘を木から抜くんじゃなくて、憑依藁人
形から抜くんだったのか。俺は薄れゆく意識の中後悔していた。そ
して、もう意識もほとんど残っていない時に俺の右手は何かを書き
始めた。

「ある日」

D「おい、ここが心霊スポットなんだよな。」

E「そうだよ、ほらこの前テレビでやってたじゃん。ここで自殺があつたつて。」

F「ああ、あの地面に僕が悪かつたてたくさん書いてあつたやつか。」

D「そうそう。」

G「おい、早くこつち来てみるよ藁人形が四つもあるぞ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4841ba/>

憑依藁人形

2012年1月13日09時52分発行